北杵築小学校【学校通信】

ともに・・・

R7. 6. 18

自ら考え挑戦し　ともに高め合う　北杵築っ子の育成

子どもが生きる授業づくりをめざして

６月４日（水）、子どもたちを下校させた後、職員研修が始まりました。この日の研修は、１８日（水）に実施する研究授業に向けて、指導案をみんなで協議するものでした。指導案は、授業内容について子どもにつける力とともに、発問や板書、また子どもたちとのやりとりについての骨組みが書かれたものです。

研究授業を行うのは、６年担任です。前半に６年担任が作成した指導案を検討した後、６年生の教室に移動し、その指導案をもとにしながら、実際に６年担任の指導を他の先生たちが子ども役となり行う模擬授業の開始です。授業は、子どもに一方的に教え込むのとは違い、子どもの思考の流れにできるだけ沿い、子どもの反応を見ながら適宜適切に対応していくことが求められます。子どもの席に座っている他の先生たちを前に、６年担任はちょっぴり緊張しているようです。

模擬授業スタート。しかし授業は幾度となく止まり、なかなか先に進みません。「次は、なんて発問するといいかな？」「〇〇という言葉を板書した方がいいよ」等、途中途中でよりよい発問・投げかけの言葉や話し合いのさせ方、また板書の仕方等について、意見が飛び交います。６年担任でない先生たちも、まるで自分が授業をするかのように、真剣に考えています。

このように、授業についてより子どもの思考に沿った無理のない指導計画をみんなで練り合っていきます。

子どもたちが受け身ではなく、生き生きと主体的に学べる授業像を描きつつ、今年度本校では、“他者との話し合いを通しながらよりよく判断し、解決できる授業”をめざしています。今回のような模擬授業も行いながら我々の授業力を向上させ、ひいては子どもたちに質の高い授業を提供できるよう、日々努力してまいりたいと思います。

ピカピカプールに　光る汗

６月４日（水）、プール清掃を行いました。児童数の減少により、プール清掃に大幅な時間を費やさざるを得ないこともあり、保護者や学校運営協議会委員の皆様に作業のご協力のお願いをしたところ、清掃の負担が少なくなるようにと、保護者の方が高圧洗浄機を数台貸してくださいました。また、地域の方もお手伝いに来てくださいました。大変ありがたく感謝しています。

この日は、前日の雨から一転。晴天の中での清掃となりました。１年生と２年生はプールサイドの清掃を、３年生はトイレと更衣室の清掃を、４～６年生はプールの底や側面の清掃です。

これに先立ち、前日に全教職員で、水を抜いた後のたまった泥やヒノキの葉を大方取り除きました。しかし、全ては取り切れず、プールには泥がへばりついています。ブラシでごしごし力を入れて汚れを取らなければなりません。きれいなプールに入れるよう、みんなで力を合わせ広い広いプールを少しずつきれいにしていきます。

暑い中でしたが、地域や保護者の方のご協力もあり、２時間でプール内の清掃を終えることができました。

ピカピカのプールの輝きとともに、子どもたちの汗も光っていました。

心があたたかくなります　～小さな手のリレー～

６月４日（水）の児童朝会の折、私が以前胸を打たれ感動したお話を紹介しました。

このお話は実話で、目の病気で全盲になった男性が毎朝通勤で利用するバスの乗り降りを、同じバスを利用して登校する小学生たちがサポートするという心温まるお話です。

お話の主人公のモデルとなった男性は、働き盛りの３５歳頃から視力を失い始めたそうです。目が見えなくなることで通勤途中のいろいろなことが負担となり、また働き盛りの時期にもかかわらずバリバリやれず、仕事を辞めようかと思ったこともあったそうです。

そんなある日、男性がいつものようにバス停でバスを待っていると、「バスがきましたよ」という女の子の声が聞こえ、その子の小さな手が男性の腰をそっと押してバスの入り口まで案内してくれたのです。そこから、男性と女の子との交流が始まります。そして、いつしか、男性にとって嫌だった通勤時間が、幸せな１日の始まりになっていたそうです。

女の子もとうとう小学校を卒業してしまいます。男性が「また一人で通勤か」と思っていると、いつもと違う女の子の「バスがきましたよ」という声が聞こえ、背中に手のぬくもりを感じます。その女の子に代わって下級生が見よう見まねでサポートしたのです。このような“自ら始めた”子どもたちのサポートは、“小さな手のリレー”としてなんと１０年以上も引き継がれました。

困っている人を助けたいという思いはあっても、それを行動に移すには大人でも勇気がいるものです。サポートを始めた女の子、そしてそのサポートを自ら引き継いでいった下級生たち。子どもたちの強い思いと行動力は本当に素晴らしく、本校の学校教育目標の“自ら考え挑戦し”につながるところがあります。

このお話は、「バスがきましたよ」という絵本となって、出版されています。大人が読んでも胸打つ絵本です。図書館で目にしましたら、ぜひ手に取ってみてください。